

## 日本医学教育学会第30回大会：日本大学医学部（1998年）<sup>\*1</sup>

櫻井 勇<sup>\*2</sup> 堀江 孝至<sup>\*3</sup>

第30回という記念すべき大会が日本大学医学部の主宰で開催された。東京都千代田区九段南（JR および地下鉄・市ヶ谷駅徒歩2分）に所在する日本学会館（日本大学創立90周年記念館）において平成10年7月16日と17日の2日間にわたって行われた。大会長：櫻井勇（病理学），実行委員長：堀江孝至（内科学）の下に実行委員会が企画・準備し，当日の運営を行った。

大会のメインテーマを「医学教育の未来を考える」とした理由については、「わが国独自の新しい医学教育を模索できる会にしたいと願っています。記憶偏重型から問題解決型への転換を図るといふ従来からの改革のための方策は重要なことと考えますが，一方ではこの考えの基本が外国からの輸入であることで，わが国の教育改革の限界を示唆しているようにも感じられます。教育者自身に教育における創造性がなければ，若い人々に創造性を育む教育環境を提供することは困難なのではないかと考えるからであります（略）。」と大会長挨拶のなかで述べられている。

シンポジウムの題が「医学教育—既成の概念を超えて」と定められたのも，この理由からである。第1日目のシンポジウム（司会：原田研介，伴信太郎）では，医学教育におけるコンピュータの導入，選択コース，メディカルヒューマニティの教育および1年次に臨床教育・6年次に教養教育という逆転の発想によるカリキュラムの提唱などの問題が論議された。

特別講演は2題あり，慶應義塾大学の井下理教授による「教育評価と企画開発」と日本大学の大道久教授による「医療評価と医学教育」が行わ

れた。行動科学的アプローチが乏しく，合理的な評価が行われてこなかった日本にとって，いずれも重要な問題であり，適切な評価の難しさはあるものの，医学教育と医療の改革には必須のものである。

パネルディスカッション（司会：堀江孝至，福井次矢）は「学生中心の問題解決型臨床講義」をテーマとして，臨床講義の改善に向けたPMP・CCの試みを教員およびそれを経験した学生の両者から発表されたのを皮切りに，シミュレーションを加えたロールプレイ型臨床講義，臨床講義の変革とCAIによるcase based learning，学生による自主的勉強会からの提言などについて報告，討議された。

要望演題は，「総合診療科」6題，「プライマリケアとしての卒後教育」6題，「教育とマルチメディアの利用」4題，「コメディカルとの協同」3題，「教育の評価ⅠとⅡ」計13題，「看護教育」6題，「コメディカルの教育」5題および「選択コース」2題が発表された。

一般演題については，「コミュニケーションと面接技法」6題，「プライマリケアとしての救急医学教育」6題，「教育方法」6題，「基礎・社会医学系ⅠとⅡ」計10題，「初期研修」6題，「OSCEⅠとⅡ」計12題，「Clinical clerkship」4題，「Evidence-based medicine」5題および「態度・倫理・終末医療」7題が報告された。

要望演題と一般演題では，プライマリケア，教育の評価およびOSCEに関する演題の多いことが目につくが，これらが時局的な課題であるためであろう。

本大会が，問題山積し，独自の課題も多く存在するわが国の現状を踏まえつつ，日本の医学教育者各人が創造性をもつことの重要性に留意し，その実践を行える教育環境の開発を展開するための契機となれば主催者として大きな喜びである。

<sup>\*1</sup> The 30th Congress of Japan Society for Medical Education (1998), Nihon University School of Medicine  
キーワード：日本医学教育学会大会，第30回，1998年

<sup>\*2</sup> Isamu SAKURAI 日本大学医学部長(当時)，大会長

<sup>\*3</sup> Takashi HORIE 同・学務担当(当時)，実行委員長